

# 日本に住む韓国人児童生徒への韓国語教育

## —在日韓国人とニューカマー韓国人の子どもたちに注目して—

13K019 金 妍優

### 1. テーマの概要と動機

現代社会はグローバル社会であり、世界のどこを行ってもその国の国民だけではなく、様々な国からの外国人と会う。旅行はもちろん、外国で日常生活をしている人々も少なくない。外国に住んでいる人々の立場も様々である。会社員、主婦、先生、宗教の伝道師などいろいろだが、その中には外国人の子どもたちの数も増えている。本稿では、その子どもたちに対する母語教育や言語教育について考えたい。外国に在留している子どもの言語教育は、国際化されているこの社会でもっとも重要な問題のひとつであり、考える価値がある。

なぜこのテーマだったのか、わたしの問題意識の契機は次のようなことだ。大学で日本語非母語話者として日本語の授業や日本語教育学の授業を受けて、言語教育について考えることが多かった。また、アルバイトで韓国籍の子どもたちや在日韓国人の子どもに韓国語を教えることで、彼らに対する韓国語教育は単純な言語教育と違うことを感じる事が多かった。

例えば、外国語を勉強する人々の中には、自分が興味や好感を持っているという理由で言語を学ぶ人が多いだろう。しかし、わたしが教えた子どもたちに対しては、ほぼ強制されていた。韓国にいる祖母や祖父と話が通じなくて、孫と距離感を持ってしまう、いつか母国に帰る可能性があるので母国語である韓国語も教えなければならないなど、子どもたちには選択権がなく、強制的に学ばされている。このことが一般的な外国語学習者、つまり、言葉の必要性を思っ自分の選択で学ぶ人たちと違うところであると気づいた。

彼ら（在日韓国人とニューカマー韓国人の子どもたち）との経験や外国人の子どもに対する母語教育、継承語教育や異文化生活の中で会う問題などを授業で議論し、そのテーマに基づいて、レポートとして自分の考えを述べ、インタビューを行ったことがある。しかし、彼らが遭遇する問題は彼らの個人的な努力だけで解決できる問題ではなく、現代社会の一つの問題ともいえ、国際化されている社会で最も重要な課題であることに気づいた。その理由で、このテーマに対してより詳しく調べて勉強し、自分の考えを改めて整えたいと考えた。

本稿ではまず、言葉の定義を説明し、子どもたちの問題を整理したのち、具体的な事例を二つあげる。それをふまえて、問題解決のための提案を述べたいと思う。

## 2. 在日韓国人とニューカマー韓国人とは？

現在、日本にいる韓国人は大きく分けて二種類に分けられる。それは、在日韓国人とニューカマー韓国人だ。両者の違いについて、ここでの言葉の定義を書いておきたい。

在日韓国人とは、韓国の人口歴史辞典によれば、韓国が日本の植民地であった時、日本に渡日した韓国人である。1910年の日韓併合<sup>1</sup>まで日本に住んでいた韓国人は、主に留学生と短期労働者であった。短期労働者は炭鉱、鉄道事業などで働き、その労働者の数は1910年代から増え、第1次世界大戦の後には日本経済の成長とともに、労働者の数も増加したと書かれている。

1945年の韓国の光復<sup>2</sup>の頃、日本にいた韓国人は200万人を超えていた。日本の敗戦とともに140万人が帰国したのだが、さまざまな事情で帰らず日本に残った60万人が現在の在日韓国人の始まりである。その在日韓国人の子どもや孫である在日韓国人2世、3世は日常生活の中で意識的に母国と断切され、しかも日本人と同等の権利を持つには日本人として帰化の方法しかないと言われている。しかし、帰化したとはいえ、完全な日本人になれないことが、彼らの終わりがない問題である。

もう一つのニューカマー韓国人とは、解放されてから20年ほどたち新たな移住が始まり、1980年代の後半から本格的に海外への移住が増加した。その中で日本に仕事や生活のために来た韓国人のことを、ニューカマー韓国人と呼んでいる。

ニューカマー韓国人は在日韓国人に比べると、現代社会で自由に動いた人が多く、来日した理由や職業の範囲も広い。

在日韓国人とニューカマー韓国人はこのような違いがあるが、その子どもたちは特に決められた違いはない。しかし、言語と母国に対するアイデンティティについて、共通した問題を持っている。ここでは主として言語的な問題を述べていく。

その子どもたちが遭遇する言語的な問題はどのようなものか、自分の周りの事例を使って説明する。また、在日韓国人2世のインタビューも参考にしたい。

## 3. 日本に住む韓国人の子どもたちが持つ言語的な問題

それでは、子どもたちが遭遇する言語的な問題としてはどういうことがあるだろうか。第一に、上述したとおり、自分の意志に関わらず半強制的に言語を学ばなければならないという問題がある。わたしが教えている子どもの中では、自分の意志や必要性を感じて韓国語を学ぶ子どもは残念ながら一人もいない。家族や周りの人たちから当然学ばべきと言われ、仕方なく学んでいる子どもがほとんどだ。

ふたつ目は、上の問題とも続く問題だが、それを理由に母国語を勉強することが嫌になることである。勉強しているみんなに聞くと「韓国語嫌だ」、「別に日本語話せるから勉強する必要ないし」など母国語である韓国語を嫌がる子どもが多い。

さらにもう一つの問題としては、家庭でもそういう立場の子どもになぜ言葉を学ぶのか、母国語はどういうものなのか、十分に理解をさせていないことがある。それをしっかり考えず無責任

的に勉強させ、母国語に興味を持たせるために家庭でも少し関心を持って使うべきだが、それがなかなかできない。

最後の問題は、母国語を学ぶ環境が十分に整っていないことだ。制度的な問題と個人的な問題があると考えられる。まず制度的な問題としては、子どもたちに母国語を教えてくれる場所が少ないことだ。たとえば、新潟では、子どもに母国語を教えられるところが民団（財団法人日本大韓民国民団：以下「民団」）と言うところしかなく、市内に住んでない子どもたちは距離が遠いため、民団まで来ることができないことが多い。また、教材の種類も少なく、一人一人に合った教育ができない。子どもの年齢・母国語に対する認知度に合う本の種類が少ないため、中学生までまったく言葉を知らない子も、少し知っている子も、同じ本を使って教えているのが現実である。その教材を国から作って送られてくるということは、国も子どもに対する母語教育に関心を持っていると言えるが、一方では関心を持つだけで詳しい改善案を考えていないことでもある。

一方で、個人的な問題として、子どもの周りの環境、特に家庭教育である。身近で母国語を話す人がいないため、子どもも母国語の必要性を感じない。実際、自分が韓国人だから子どもも韓国語を話してほしいと連れてくる両親を見ると、そう言いながら日常生活では韓国語を使わない。民団で言葉を習っても使わないとすぐ忘れるので、子どものために母国語を使って話しかけることを頼んでいるが、授業の時も連れてきて終わるまで子どもとは日本語で話すことが多い。

このように、子どもにとって、環境的に母国語の習得が難しいことが、簡単には解決できない問題の根本にある。

以下にいくつかの事例を述べ、子どもの言語（母国語・継承語）教育問題を考えていく。

## 4. 事例とインタビュー

わたしが日本に来てから知り合った人たちの中で、日本に住んでいる韓国人と子どもたちもたくさんいる。そして、大学に入ってから子どもに母国語の韓国語を教える機会が増え、様々な経験をした。その経験の中で、本文と関連した事例をいくつか紹介したい。事例では、子どもたちの名前を、A子（8歳）、B子（7歳）、C子（11歳）として述べていく。

また、在日韓国人2世のDさん（61歳）と、幼稚園の頃来日した韓国人の学生のEさん（22歳）にそれぞれインタビューを行い、彼らにインタビューした内容をまとめて示す。

### 4.1. 韓国語ができない私は日本人

簡単にA子について紹介しておきたい。A子の両親は、二人とも韓国人で留学生として来日し、大学卒業後も日本で就職して日本の生活を続けている。ニューカマー韓国人の両親を持つA子は日本で生まれて育ち、母国の韓国より日本の生活に慣れている。A子が大きくなって、韓国語も勉強してほしいという両親の意志で、民団にきて韓国語を勉強している。

両親が韓国人であるため、A子は簡単な韓国語は意味を知っており少しは話せたりしていたので、韓国語の授業<sup>3</sup>は難しくないと考えていた。しかし、A子はなぜ自分が韓国語を勉強しなけ

ればならないのか、二か国語を使わなければならないのか十分理解ができず、自分の立場が嫌になったと話したことがある。

わたしは民団での授業の時に、どうしても子どもたちがわからない言葉を日本語で説明することがある。その時にA子は、「金さんも日本語話せるのに、なんでわざわざ韓国語を話さなければならないの?」と言った。A子が言う通り、わたしも日本語がわかるので、韓国語を使わなくてもコミュニケーションができる。だから、A子の言葉は間違っていない。しかし、子どもの立場で理解できるように伝えることが難しく、「韓国人であるわたしたちは、韓国語も話さなければならないのは当然のことだよ」と伝えた。

後で考えてみると、A子が話す通り、韓国語でなくても、日本語でも韓国人同士で話せるのだ。わたしとの会話から、A子が少しでも韓国語学習に強制性を感じることを心配したが、次の授業でその心配は現実であることがわかった。

A子はその時から韓国語に興味を持たず、「自分の生活は特に言葉で問題になることはないの、今は日本人の自分が好き」とわたしに伝えた。A子以外の子どもたちもほとんどが日本で生まれて日本で育った子どもたちであり、彼らがよく言う言葉は「自分は他の家族と違って日本人です」だ。

その子たちは自分と同じような友だちが何人もいることが嬉しいのか、だから安心するからなのか、韓国語教室へ言語習得に来ると、こうした話をして盛り上がっている。そして、なぜ自分たちは韓国語を話さなくても良いのかを、議論し確認しあうこともある。

このように、A子だけではなく、他の子どもたちの母国語を勉強することの大切さやなぜ勉強するのか理由もきちんと理解できず、自分のことを日本人と言い、韓国語学習の必要性を理解していないことが多い。

## 4.2. 『君が代』を歌ってお父さんに怒られました。

次にB子についてだ。B子は、在日韓国人の子どもで、お母さんはニューカマー韓国人である。両親のどちらも韓国人と言うことは、A子と同様だ。B子もA子と一緒に韓国語教室で勉強し、今年4月に小学生になった。B子が小学生になる前まで、B子のお母さんは心配なことがあった。それはB子のお父さんが、日本の小学校に行かせないで、家で勉強させると言っていたのだ。お父さんは、B子が日本の小学校にいくと完全に韓国と離れてしまうことになることと心配し、家で勉強させながら韓国語を教え、日本に住んでいる韓国人の子どもよりは韓国に対する思いが深い子に育てたいと考えていた。反対にお母さんは他の子どもと同じく小学校に入って勉強してほしいと、普通の生活を送ってほしいと考えていた。結果としては、日本の小学校に入学したが、問題はそこで起きてしまった。

日本で住んでいても韓国人なら韓国語や韓国史などを必ず勉強しなければならないという価値観を持っているB子のお父さんは、B子の入学式に来なかった。学校で流れる「君が代」や日本人と一緒にされる自分の娘の姿を見たくなかった。在日韓国人としてのお父さんは実際、小学校は朝鮮学校で学び、その時に朝鮮や韓国について詳しく勉強したのだろう。

娘のB子は韓国語も少しはできるが、当然日本に住んでいるので、生活の中心になる言葉としては日本語が優先する。幼稚園や小学校も日本の学校に行っているの、日本の教育を受けていることになる。もちろん「君が代」も歌う機会は少なくない。韓国語を勉強する間、去年一緒に歌った「サントキ」<sup>4</sup>という韓国の子どもの歌を歌ってみようとした後、B子の口から「君が代」が流れた。当然ながら小学校に通っている他の子どもたちも一緒に歌い始めた。それを聞いたB子のお父さんが「その歌をうたうな」と大きい声で怒り、理由もわからない子どもたちはびくりにした顔でB子のお父さんをみていた。

韓国で教育を受けたわたしは、B子のお父さんがなぜ怒ったのか理解できる。しかし、子どもたちは学んだことを楽しく歌っただけである。「その歌を歌わないで、韓国語の歌を覚えなさい」と怒られた子どもは、韓国語を話せないと怒られると思っていたのか、わたしに「ここまでしかできないので、ごめんなさい」と言った。

その言葉をきいて、韓国語を勉強させる前になぜ君たちは勉強しているのか、韓国語とは何なのかを理解させることが、まず最初にやるべきことであると考えた。それは母国語を教える立場からも当然やるべきだが、家庭で子どもに理解させることがより重要だと考えている。

### 4.3. 母国の韓国に帰りたくない

次にC子について述べる。C子は、現在はもう帰国して韓国で生活しているが、C子が韓国へ行く前の話を紹介したい。C子の両親は二人ともニューカマー韓国人で、留学生の時にあつて日本で生活を続けていた。C子のお父さんは博士論文の準備をしていて、お母さんは日本人に韓国語を教えながら、家族で日本での生活を送っていた。ところがC子のお父さんが事情により一人で韓国へ行ってしまい、お母さん一人でC子とC子の弟の面倒をみていた。しかし、お母さんが夜の授業がある日が多く、子どもたちは二人で家に残るのが心配で短い時間わたしに子どもたちの面倒を見てくれないかと頼んだのだ。子ども好きのわたしは面倒みると約束し、子どもたちに韓国語の勉強をさせることにした。なぜなら、C子のお母さんのお腹には双子の子どもがいて、一人で4人の子どもの面倒をみるのは大変なので、韓国に帰国することに決まったと言われていたからだ。しかし、おかあさん自身の事情もあり、すぐ帰ることはできないので、ある程度日本の生活が整理できるまで、子どもたちの世話を頼まれた。また、子どもたちがあまりにも韓国に行きたくないと言っているの、韓国語やマンガなど興味を持つようなことを見せてほしいと言われた。

とくにC子は小学2年生だったので、韓国に帰ると小学2年に入らなければならない。しかし、韓国語のレベルは幼稚園の子どもぐらいのレベルで、すぐ学校に入って同じ年の子どもたちと勉強するには限界があるのではないかと、お母さんは心配していた。それゆえ、帰るまででもいいので、韓国語を教えてほしいと言われた。

C子は韓国に行くと「自分は韓国語を話せないの、いじわるされることが怖いから韓国に行きたくない」と韓国の話になるたびに言っていた。また、「発音もよくないことを分かっているので、バカにされることも嫌だ」といい、お母さんは国に帰っても自分は帰らないと言った。し

かし、お父さんとお母さんが「ひなまつり」の前には日本に帰ってこようという嘘を言い、C子はそれを信じて韓国へ帰った。

最近も連絡をとって聞いてみると、心配したよりは安定して生活しているが、最初は大変だったと言ひ、C子がどんなに大変な思いをしたらうかと考える。子どもに無理やり母国語の勉強をさせることもよくないと思う。しかし、C子の両親のように、突然にさまざまな理由で止むを得ず国に帰国しなければならないという可能性があるのでは、子どもに対する母国語教育は要らないとは言えない。

そして、C子のように自分の意志ではなく、両親の事情で子どもの生活環境が変わってしまうこともよくないと考えた。

#### 4.4. 在日韓国人2世のインタビュー

次に、在日韓国人2世のDさん（61歳）へのインタビューについてまとめてみる。インタビューの相手は母で、母は日本で生まれた在日韓国人2世である。インタビューの時以外も韓国語や子どもの頃の韓国語授業の話をよくするので、より詳しく母国語に関する考えを聞きたくてお願いした。2016年6月9日午後5時から1時間程度、自宅でインタビューを行った。

##### ① 簡単に子どもの頃どんな時代だったのか教えて下さい。

わたしが子どもの時は日本の経済高度成長期であって、人口も増え、石炭から石油に変わる時代と伝えるとわかりやすいですかね。日本社会が現代化される時期でした。しかし、在日韓国人に対する差別はまだまだある時代でした。父も成人になったら韓国人と結婚すると言う時代でした。他の周りの韓国人はある程度日本に定着して生活していて、子どもを産んで差別の中でも日本人と一緒に生きていくしかない頃でした。

##### ② 母国語である韓国語をどのくらい話せますか？

ほとんどわかりません。簡単な挨拶ぐらいで、相手が話すとだいたいこんな感じで、こういう意味で話しているだろうと想像するぐらいです。韓国語の字もどんな形で書かわかるぐらいだけで、自分も名前以外はわかりません。

##### ③ 子どもの頃、韓国語の授業を受けたことがありますか？

そうですね。姉や兄と一緒に民団に行って勉強した覚えがあります。父から勉強してみたらと言われ、その頃民団では子どもたちにハングル<sup>5</sup>を教えていて、初めて韓国語を習いました。わかりやすく説明してくれて、その頃はすぐ覚えましたが、やはり使わないと忘れるものなんですね。確かに、短時間で字を全部覚えた記憶があります。その時勉強した韓国語の教材はまだ持っています（本稿末の写真）。

##### ④ 子どもの頃韓国に帰ったことはありますか？

もちろんあります。姉は大きくなって韓国の梨花女子大学へ韓国語の勉強のためにも行ってきましたし、祖母や祖父が韓国に住んでいたのでは、夏休みになると遊びに行ったりしました。成人になってからは貿易の仕事のために度々行きましたよ。

##### ⑤ 子どもの頃、母国語を習う時にどういう気持ちでしたか？

最初は必要性を感じられませんでした。とくに父と行かない限り韓国へ行く機会は少なかったし、その頃来た韓国人はいつか韓国に帰るだろうという考えより、日本でもう定着して住んでいるので、母国への懐かしさや寂しさはここにいる韓国人たちが集まって遊んだり、お正月を一緒に過ごしたりすることで十分だと思いますよ。現在は何か目的があってそのために来たから、達成したら帰る雰囲気ですけどね。

ただ、父の国であり、距離は遠いけど自分の国でもある韓国の言葉はどんなものか気になってちょっと学んでみるくらいでした。

⑥ **では、小さい頃言語的な問題を経験したことはあまりないですね。**

在日韓国人に対して差別がまだまだたくさんある時代だったので、ないとはいえないですね。クラスの友だちに「朝鮮語（韓国語）でしゃべってみろ」とか、話せないと言うと「朝鮮人なのに自分の国の言葉もわからないのか」と言われる時もありました。また、字を間違えると在日韓国人だから日本語が分からないと思われる時もありましたよ。今は外国人と共存することが当たり前だけれど、わたしが子どもの頃は違いました。

⑦ **今、日本にいる外国人の子どもたちの母国語教育は必要だと思いますか？**

必要だと思います。わたしが小さい頃は急に帰国しなければならなかったり、他国に移住することが発生したり、そういう子どもにとって大きな変化は少なかったです。わたしの両親も1割でも韓国へ行く場合があると思っていたら、続けて韓国語について勉強させたと思います。しかし、あの頃は国際化された時代でもなかったし、住んでいるところから離れることが少なかったため母国語の教育は要らなかったですね。

今は時代が違うので、その子どもたちが大きくなって母国で住みたい気持ちをもったり、また、両親の事情で子どもたちの立場も変わってきたりする可能性が高いので、子どもたちはそれを学んでおくべきだと考えます。在日韓国人4世ぐらいになると日本人と一緒にだから特に必要性はわからないかもしれませんが、現在はなんでも学んでおくといいと思います。

⑧ **子どもたちが母国語学習の意義を理解していないという問題に対してどう思いますか？**

残念ですね。まず、自分の意志とは関係なく現実が変わってきていることを考えるだけでもこころが痛みますね。それは、親がきちんと子どもに理解させる必要があると思いますよ。わたしはただ父が韓国人だからと言う理由だけでした。それでも韓国語を学ぶ理由になりましたよ。今の子どもたちにももっと十分に説明することが当然必要ですし、学ばなければならないときはその理由も説明して、子どもが理解してくれることを待つべきではないかと思います。

⑨ **最後に、母国語を学ぶ中で最も大事なことは何があると思いますか？**

強制性を感じさせないことと子どもが選べるようにしてあげることが大事ではないかな。どうしても学ばなければならないときは先も伝えたように、理由を子どもたちが理解してくれるように伝えること。後、勉強させるときは一緒に勉強することも大事だと思います。わたしは何か学んでくると親がいつもきいてくれたのです。例えば、「今日は何を学んできたの?」、「今日はどこまで書けるようになったの?」など関心を持ってくれたので、月1回の韓国語授業でも家に帰って勉強したところを自慢するために、頑張っただけ記憶があります。そのようにただ言葉の勉強をさせることだけで終わらず、親も子どもが興味を持って自発的に勉強で

きるように一緒に参加することが大切だと思います。

#### 4.5. ニューカマーの韓国人学生とのインタビュー

次に、ニューカマーの韓国人の学生へのインタビューをまとめる。韓国で生まれた人で、5歳の頃日本に来て昨年まで新潟で勉強し、昨年の9月から韓国の延世大学で勉強している。インタビューは2016年4月に一度行ったが、あらためて依頼して話を聞いたのは、2016年9月18日午後3時～5時まで新潟市西区にて行った。

##### ① 日本に来たきっかけは何ですか？

父と母が日本で留学を終えて母国（韓国）に帰って結婚しました。その後、僕が生まれましたが、ちょうど父の仕事が再び日本で決まり、僕は祖父母と一緒に韓国で住み、両親は落ち着くまで二人で日本に暮らしました。その後、幼稚園の頃に自分も日本に来た覚えがあります。

##### ② 日本語を使うところで難しいことはなかったですか？

今はあまり覚えてないですけど、確かに最初は今までと全然違う言葉を使う友だちの中一人で遊んだり、すぐ雰囲気になれて楽しく過ごせたりはできなかったです。でも、小さい頃でしたので、言葉も早く覚えて日本人の友だちと仲良くなれました。多分、もう少し大きくなって、例えば小学生や中学生のように、自分の意志で何かをやろうとする時に日本に来たら、慣れるまでもっと時間がかかったと思います。

##### ③ 韓国人として経験したエピソードは何かありますか？

小学校に入学する時や高校を入学する時、とにかく自分の名前が呼ばれた時など、なんとなく「外国人」らしい雰囲気を感じ、みんなから注目されるのはいつもありました。最初はやはり珍しいし、好奇心で声をかけてみたり、韓国の話して近づいてきたりしてました。良かったのかどうかはわかりませんが、ほぼ日本で生まれたのと同じく幼稚園の頃から日本で住んでいたと話すと、友だちの反応が変わるのはおもしろい記憶の一つです。その話してみんなが安心するような感じで、「なんだ。私たちとほぼかわらないじゃんか」と言っていました。学校が終わって友だちと帰り道に外国人と会うと、「そういえば、〇〇くんは違和感がないよね。日本人みたい」と言われたこともあります。どういう風に僕の事を思っているのかはわかりませんが、もし小さい頃じゃなくて、大きくなって（中学校や高校の頃）来日したらどうだったかなと、たまに考えるときはあります。

##### ④ 韓国より日本での生活が長いですが、それでは母国語はどのぐらいですか？

家の中では母国語で会話しましたので、日常生活の話は大丈夫です。でも、韓国語より日本語の方が楽なことは楽です。日本語は全く問題ありませんが、韓国語は難しい単語や早口言葉は聞き取れないです。家でもたまに韓国語は勉強しますが、日本語より使う機会が少ないため、自分でも日本語の方が優先順位が上になっています。

##### ⑤ 母国語を使うことは大切だと思いますか？

母国語は大切だと思います。しかし、それを強制する必要はないと思います。なぜなら、僕は母国語に興味を持ち、いつか韓国に帰って勉強するかもしれないと考えているため、必要性

を感じたので自分でも勉強しています。しかし、なんの関連性もなく、興味もなければ無理やり母国語を勉強することが、逆に母国に対する嫌さを感じさせるのではないかと考えます。どんな言語でも自分の意志を伝えられるなら、どこの国の言葉でもいいのではないのでしょうか。

## 5. 問題の改善のためには

現在起きている子どもたちの言語問題に対して、改善のための案を三つに分けて述べてみたい。

まず、一つは個人の問題として「家庭での教育」があると考えられる。今まで自分が経験した子どもたちや本で読んだ子どもの話しによって、子ども自身にはこういった現状に対して責任がないということに気づいた。子どもが言語コミュニケーションで困る第一の問題は、両親にあるということである。両親は子どもに「しかたがないから、親の言うことに従ってそうするしかない」といった態度により、子どもが現状を自身で理解できるように子どもの目線で伝えることが大事だと考える。また、母国語を話せない子どもに、わたしのように母国語を教える教師にとっても同様だ。子どもたちが理解できるようなことばで、丁寧に「なぜ母国語を勉強しなければならないのか」ということを、具体的な物語などを聞かせながら繰り返し説明していくことが必要だと思う。

二つ目は制度的な問題として、「国家」の責任があると思う。現代社会は昔とは比べられないほど、一つの国に様々な外国人が住んでいる。彼らの海外生活のケースも様々でやむを得ず母国を離れて日常生活を送っていることも少なくない。その現状に比べて国は、様々な国を受け入れてくれるシステムが不足し、そこで問題も発生している。その中の一つが、私がテーマとした外国人子どもたちの母国教育問題である。国はたくさんの外国人を受け入れるだけでなく、きちんと彼らの管理・支援ができるシステムを作らなければならない。大まかなルールと法律より、一人一人が国の一部として生きていけるシステムを作るべきである。

そして、三つ目として、上の二つとは少し矛盾するかもしれないが、母国語を子どもたちが今の時点でほんとうに勉強しなければならないのかどうか、その点を大人たちももう一度考えてみるのが大切なのではないかと思う。世界は、自分たち（両親）が住む今より、子どもたちが大人になって生きていく時代の方がよりグローバル化されている社会になると思う。そのため、母国に関するアイデンティティ問題を必ず母国語で表明する必要はないのではないか。母国についての知識を教える必要はあると思うが、それが必ず母国語によって伝えられなければならないかという、そうではないのではないかということだ。つまり、ネイティブとして使える言語が一つでもあれば、それで十分なのではないか。まだ毎日学校になぜ行かなければならないのかもわからない子どもたちに、母国語学習を強く強制する必要はないのではないかと考える。

したがって、子どもたちの言語問題は彼ら自身が改善することより、大人、両親、政府などが改善しなければならないということだ。子どもたちには自分自身の立場や現在を理解する力を持たせることと、社会はそういう人々と共生できるように、なじみやすい、住みやすい社会を作ることが何よりも大切だと考える。

## 6. 結論

様々なケースで起きている言語問題について、私はこのレポートを書きながら、この問題はこれからより大きな問題になってくるのではないかと考えた。

この問題を解決するためには、偏見や差別もなくさなければならない。言語と国家や民族が結び付けられて、それが差別の理由になってしまうからだ。「わたしは人を差別することを一度も考えたことないし、思ったこともない。だから、偏見はもっていない」という考え方が、一番危ない考え方だと思う。そういう考えは「自分とは関係ない」という、無関心とつながり、結局、言語問題に対しても無関心になり、問題に対する解決からも遠く離れてしまうと考えるからだ。

また、本稿を書く中で、わたし自身の考え方が変化した点も述べておきたい。わたしは言語教育の大切さの中でも、母国語の教育について「必ず必要なもの」と考えていた。しかし、ニューカマーの韓国人の学生とのインタビューを通して、そうした信念とは、別の考えがあり、必ずしも母国語を学ばなければならないという考え方が、絶対的に正しいものではないということに気が付いた。母国語は母国に対するアイデンティティ形成にとって大切なものの一つであり、忘れてはいけないものと考えていたのだが、母国語を学ぶということで、母国に対するアイデンティティが必ずしも強くなるわけではないのだ。ニューカマーの韓国人学生が話したように母国に関しては言語の他にも学んだり経験したりする機会が多くあり、母国に対するアイデンティティは必ず言語によって生まれるものではないということだ。自分が先入観を持ち、一面的な考えだけを持っていたなと考えている。

言語教育で母国語を教えることが第一ではなく、母語として完璧に自分で違和感なく話せる言語が一つだけでも必ず学習する必要があると思った。そのうえで、自分のもう一つの言語として、母国語である韓国語を学んでも決して遅くはないと思う。わたし自身も、母語である韓国語を十分に発達させてから、第2の言語である日本語を習得し、こうして使いこなすことができるようになったのだ。

その国で生活をして生きていく外国人や外国人の子どもたちのために、特に大切になる言語教育は、その社会の問題として解決する必要がある。また、彼らを特別視して分離して教育するのではなく、国の一員として共生することが何よりも大事なことだと考える。

---

### 註

- 1 日韓併合：1910年8月22日、日本帝国主義が大韓帝国を完全に植民地化させるため強制性を持って締結した条約
- 2 光復：1945年8月15日、韓国が日本帝国主義の植民地統治から脱して自主独立を取り戻した事件
- 3 授業：月2回土曜日に2時から2時間程度、新潟民団でオリニ（「子ども」と言う意味の韓国語）教室を行っている。
- 4 「サントキ」：韓国の代表的な子どもたちが歌う歌。「サントキ」は日本語で「山のウサギ」である。
- 5 ハングル：韓国語の文字である。違う言葉は「フンミンジョンウン」といい、ユネスコ世界記録遺産に登録されている。ハングルが正式的に國文と承認されたのは、1894～1896年と思われる。

